和気氏であったというのは、やはり出雲族出身の医師にこそ、技術医学の伝統が継承されていたからではなかったか。この視座からの日本医学史の展望を試みたいと思う。

（杏林大学保健学部国文学教室）

アムステルダム大学附属図書館所蔵の『解剖学表』について

酒井　恒

『解剖学表』の蘭訳者 Gerardus Dicten について調べるために、一九八七年十月、アムステルダム大学附属図書館を訪れた。Gerardus Dicten が『解剖学表』を蘭訳（一七三四）したこと以外、新たな発見はなかった。

しかし、同図書館が、『解剖学表』を七冊所蔵していることが明らかになった。年代順には、一七三二（羅）、一七三四（仏）、一七三四（蘭）、一七四四（羅）、一七四八（羅）、一七五五（羅）、一七六五（羅）であり、ラテン語版五冊、オランダ語版、フランス語版各一冊である。一七五五年版には、クルムスの肖像の銅版画があり、この本では、前半に本文（三十八ページ）、後半に註（七十八ページ）がまとめてあり、二冊を合本したようにみえる。一七四四年版は、『解剖学表』の名が示すごとく、各譜図中の

用語を箇条書にして、一、二行の解説が加えられている。一七三四年版のオランダ語版は、大鳥蘭三郎の蔵書に類似し、第一図を除き、他の全図を巻末にまとめて整本してある。一七四八年版、一七六五年版には、一七三二年版と同様、舌の盲孔には唾液分泌管が開口する図が画かれ、胸管には、その左に訂正図が附記されている。それゆえ、譜図は、訂正したことを考慮せずに、訂正前のものと訂正後のものとを適当に組み合わせて用いていたようである。

これらの『解剖学表』について、細かい点を口述する。

（名古屋大学医学部解剖学第一講座）

スワドリング（Swaddling）と当時の小児科医たち

大野晏且

「子どもが母親の胎内から出るやいなや、そして手足を動かしたり伸ばしたりする自由を楽しむようになるやいなや、人は子どもに新たな束縛をあたえる。産着にくるみ、頭を固定し、足を伸ばさせ、手を体のわきに垂れさせて、寝かせる。あらゆる種類の布や帯を巻きつけられて、位置を変えることもできなくする。」（ルソー『エミール』樋口謹一訳におけるビュフォン『博物誌』からの引用）

このように新生児に対し、生後四ヵ月から九ヵ月に渡って念入りに二時間もかけて、産衣の上からリンネルの細帯や紐で堅くグルグル巻きにし、丁度、小さなミイラか繭のように縛り、身体を動かす自由を奪う不合理な緊縛的育児習俗が、スワドリング（Swaddling）に他ならない。

子どもに最も親密な眼差しで接すべき小児医学とスワド